

される。」(87, 118 ページ。)信用と景気循環にかんしては『資本論』第3部第30~32章に多くの分析が示されている。しかし競争即信用という把握はとりえない。競争は産業資本にかんして、多数の個別資本間の相互作用であり、そこに資本の内的本性があらわれ出るのである。そこで競争の次元でまず追求される必要があるのは、著者も正しく指摘していたように、社会的需給の不均衡の累積過程ではなかろうか。

著者は利潤率低下傾向と恐慌との関連すなわち資本一般の次元での恐慌について説明している場合に、競争についても言及し、「個別資本は、生産を拡張して、利潤率の低下を阻止しようとする。市場の分け前をあらそう競争のうえにたつて生産が拡張される。もし市場がどこまでも拡大されれば、生産の拡大によって利潤率の低下は阻止されるかもしれない。しかし消費者大衆の消費力は賃銀の法則と雇用の限界とによって制限されている。したがって商品の過剰生産と商品価値の実現が発生する。……恐慌は実現恐慌として発現する。しかし……過剰生産は資本の運動の次元における過剰生産、資本の過剰蓄積なのである。」(57 ページ)ここでいわゆる大衆の過少消費と実現不能とが、競争に関連して述べられている。これと前掲の市場利潤率の運動とはどのように関連をもつと理解しうるのであろうか。やはり競争の次元での社会的需給、価格の運動を分析する必要があるのである。

この点は独占段階での分析視点にも直接関連してくる。著者は独占価格の基本的規定のうえに立って、独占体が「恐慌局面にかぎらず産業循環の全過程をつうじて生産の制限によって市場における供給を調整し、価格と利潤の水準を維持しようとする強い傾向をもたらしとすることができる。……社会的生産全体からすれば、過剰生産能力と過剰労働力が存在することになる。……停滞の傾向を生じる。」(132 ページ)と述べている。そこで国家による固定資本投資の増大、国家支出による社会的価値生産物の購入の増大は、「恐慌とは別に、資本の価値を喪失させる諸契機」(139 ページ)であり、国家独占資本主義の条件の下での恐慌の様相変化の重要な契機である。これらの指摘は著者のすぐれた視点から生み出されたものと言えよう。このような過程をさらに深く追求してゆくためにも、自由競争段階における資本の競争の論理展開が要請されているのである。

この点に関連しているのが、第3章における瀬尾氏の価格機構の分析である。瀬尾氏はそこで、古典的価値法則支配のもとで、景気の上昇局面における価値と価格の背離をみとめ、これに対して独占段階での価値・価格の

背離を否定する論理を展開される(311 ページ, 318 ページ。)

第1に、景気循環過程における価値・価格の背離、あるいは市場価格の上昇・下落は、すでに述べたように、その内的構造と運動形態がなお追求されるべきものであろう。瀬尾氏は恐慌における資本の価値破壊を収入の減少による価値減少と規定されている(292, 294 ページ)のであるが、小椋氏の指摘にもあるように、恐慌は資本の過剰の破壊であり、それによって再生産の均衡を回復するのである。それゆえ実現恐慌と規定される。瀬尾氏が規定されるように、収益性の低下ならば価格低落なしでも生じうる(293 ページ)。恐慌において破壊を要する過剰資本の発生過程を、価格・需給の運動過程から導びき出さねばならないであろう。

第2に、独占段階での「価格水準の上昇は、それだけ価値・価格の乖離を生み出すものということとはできない。」(311, 320 ページ)とされる論拠には疑問がある。瀬尾氏はその点を、寡占的条件下では「労働の技術水準の複雑化と高度化」により、いわゆる複雑労働としてより多くの価値を生み、労働生産性の上昇が価値水準の低下とはならない、とされる(311, 320 ページ)。もしこのようであれば、寡占的条件のもとで資本は新技術を導入するであろうか。著者は、特別剰余価値とここでの価値上昇とは区別される(332 ページ)のであるが、新技術の導入の規定として両者はどのように関連するのであろうか。これもまた競争分析にとっての重要な課題なのである。

第2章における奥村氏の、今世紀におけるアメリカの資本蓄積過程、および第2次世界戦争以後における循環の各局面を対象とした実証研究、第3章における瀬尾氏のインフレーション、国際金融にかんする実証研究、はともに豊富な内容をもつものであって、それらにふれえないのは残念である。ここでは小椋広勝氏のすぐれた問題提示とその展開を受けとめ、その貴重な視点を評価するとともに、そのいくつかの論点にふれて、われわれに遺産として残された氏の研究方向の重要な意味をさぐってみたのである。

【種瀬 茂】

藤野正三郎編

『富の構造』

日本経済新聞社 1968. 8 260ページ

〔研究報告 No. 21〕

本書は、国民経済における実物的・金融的ストックの構造についての独立の論文5篇を収めた論文集である。5つの論文以外に「結び」として1章が加えられているが、これは、先行する論文のなかで理論的あるいは実証的に確かめられた富保有における「選択」を1つの仮説としてまとめて、問題点の展望を試みようとするものである。各章の題目と執筆者は、次のとおりである。

#### 第1章 富の構造の分析

—時間選好・危険要素と資産選択—  
(藤野正三郎)

#### 第2章 資産選択の理論 —展望—

(藤野正三郎・寺西重郎)

#### 第3章 民間貯蓄の長期動向と家計の金融貯蓄

(江見康一)

#### 第4章 貯蓄構造と資産構造の国際比較

(溝口敏行)

#### 第5章 個人金融資産の変動

(加藤和正)

#### 第6章 結び —一つの仮説—

(藤野正三郎)

第1・2章では、資産選択問題の理論的分析がおこなわれ、その他の章では、その実証的分析が示される。章を追って問題点を取り上げよう。

藤野論文は2部分から構成されている。第1の部分は、人が、ある経済的視野のなかで初期の富と所得の合計を、消費と諸資産に配分しようとする場合の最適化行動を分析する。問題の設定は次のとおりである。初期の富と資産価格の標準偏差をパラメーターとする効用関数を考え、最大の効用を与える資産構成と消費水準がどのように決定されるかを検討する。この均衡水準の比較静学から次の結論がえられる。資産総額にしろ危険資産の割合は、危険の指標である資産の期待価格の標準偏差が大きくなるにつれて減少する。これは、危険をさける人 (risk-averter) の効用関数を前提することから導びかれる当然の帰結である。しかし、それと同時に、平均以上の高い危険度をもつ資産の割合は、初期の富ないし所得の増加とともに増大することが認められる。これは、人が、資産総額の増加につれて、そのポートフォリオのなかで危険の高い資産の比重を高めていく傾向があることを示している。これは、外見上は、危険を好む人 (risk-lover) の行動をおもわせる。藤野論文が意図する資産構造分析の要点の1つは、この外見上の危険愛好的行動を説明することであった。そしてこの意図は、とくに工夫された効用関数を採用することによってとげられている。ただ、

この効用関数は、次の2つの問題点を含んでいるようにおもわれる。その1つは、処分可能な資産の総額が増すにつれて、消費が相対的にだけでなく、絶対的にも減少する (24ページの注23の注意にもかかわらず) 可能性があると考えられる点である。いま1つの問題点は、この対数線型の効用関数では、定義域は1より大なる範囲となり、とくに負の資産項目としての負債のとり扱いが不可能となることであろう。藤野論文の第2の部分は、人的富そのものの不確実性を与える資産構成への影響を、保険加入ゲームのかたちで定式化することを試みている。この展開は、きわめて創意に満ちた興味深いものであり、そこでは、人は、自然とのミニ・マックスゲームにおいて保険に加入するのが合理的であること、そのさい負担する保険料は、ある適正水準に定まることが結論づけられる。

藤野・寺西論文は、資産選択理論のほとんど全領域にわたる展望を試みたものである。展望論文は、ほんらいテキスト・ブックの性格と専門論文の性質とを合わせもつものであり、その両面の調和に独特のむづかしさがあると考えられる。この論文は、長大なものであり、論点がきわめて多岐にわたっているため、展望論文のもつこのむづかしさを考えさせる。つまり、収められている話題が多いために、まえもって関係文献に通じていない読者には、理解困難な個所が少なくない。示されている多くの主題のなかにあって、とくにわかり易く、説明に一貫性があるのは、2母数接近法にもとづく資産選択理論の展開である。筆者たちは、この理論をかなり詳細に解説し、さらにそこから導びかれる分離定理を3つの類型にわけて説明する。ここでそれらの類型について詳述する余裕はないが、これらの分離定理の型の区別をあきらかにしたことは、この論文のメリットの1つであるといえよう。問題の要点は、危険をさける人の2次効用関数のもとでは、資産収益 (率) の期待値その他をパラメーターとして有効ポートフォリオを求め、その制約下に期待効用を最大にすることと、直接に期待効用を最大にすることとが、完全に同値であるということである。この問題が、2母数接近法全体のもつ基本的な性質に関連づけて整理されていれば、論点がいっそう理解されやすいとおもわれる。

江見論文は、民間部門の貯蓄と金融貯蓄の長期的動向についての事実検証に分析の焦点を合わせている。そこで示されているいくつかの論点のうち、とくに2つのことに注意したい。その1つは、筆者が、1878年—1937年のわが国の民間貯蓄と個人貯蓄を、金融機関の側から



の資料にもとづく金融資産増加によって推計しているという点である。この推計方法には、筆者も述べているように概念上の無理が含まれており、この問題は必ずしも十分解決されているとはおもわれない。第2に、筆者は、近年家計の金融貯蓄が、実物貯蓄に比して、著しく急速に増大している事実注目し、その動向を2つの成分に分解して示すことを試みている。すなわち、家計の金融貯蓄率は、経常余剰の留保率と負債増加・投資率との合計として示され、近年における家計の金融貯蓄率の上昇は、前者の率よりもむしろ後者の率の上昇によって説明される。この分析は、家計部門の金融連関比率(FIR)の上昇をたんに指摘するよりもはるかに興味ぶかいといわねばならない。

溝口論文は、貯蓄・資産構造の国際比較という資料的にも理論的にも困難な分野について、利用可能なかぎりの資料をもとにファクト・ファインディングを試みたものとして高く評価されねばならない。本論文に示される2,3の結果は次のとおりである。(1) マーシャルのkの値は、通常国ごとにきわめて不規則な大きさを示すようにみえるが、広義のマーシャルのkと一人当たりGNPのあいだには、正の相関がみられる。(2) わが国の個人部門の金融資産構成をみると、貯蓄性預金の比重が他国に比して著しく高い。(3) わが国の個人部門にあつては、西欧先進国に比して負債・所得比率がきわめて低い。筆者は、これらの事実を説明する要因として、わが国では消費水準の高級化が進みつつあること、しかし保険、株式その他の有価証券の保有がまだ普及していないこと、消費者金融制度が整備されていないこと、などをあげている。ところでこれらの要因は、いずれもわが国あるいは他国の制度的、慣習的事情であることが注目される。事実、制度と慣習は、資産構造の決定要因のうちもっとも重要なものであるかもしれない。しかし、資産構成は、一方で実物的経済循環を反映するような仕方では定まらずである。本論文は、資産構造の国際比較を、職種別、階層別データにまで立入って多角的におこなっている点できわめて示唆に富むものである。しかし一面では、これらの結果が、実物的集計値とほとんど比較されていないために、通常直観的に推論されているような、わが国の金融資産構成の特色の、実物的側面からの説明がえられないことがおしまれる。

加藤論文は、2部分から構成されている。第1の部分は、個人セクターの金融資産構成の動向を資料にそくして分析する。第2の部分では、金融資産の種類別の需要が、回帰モデルによって計測されている。論文の後半に

示される金融資産需要の測定において、筆者は、金融資産を、通貨、株式投資信託および貯蓄性預金等の安全資産に分類し、それぞれの需要について異なる行動仮説をおき、それにもとづく需要関数を計測している。とくに注目すべき点は、通貨需要を取引残高と予備的残高の需要にわけ、前者は、期待所得水準によって説明され、後者は、期待所得の変化によって説明されるとしていることである。ここでの期待所得の形成期間についての分析は、通貨需要関数の計測を理論的に支持している点で本論の大きなメリットであるとおもわれる。ただ、測定された通貨需要関数の説明力が非常に良好であるにもかかわらず、次のような疑問を禁じえない。まず、通貨の予備的需要が、個人部門の期待所得と実際所得の変化の差に依存するとしながら、最終的には資金余剰を説明変数として採用する理由が明確でないようにおもわれる。つぎに、通貨需要および株式・投資信託の需要の第3の説明因子として、過去における資産選択比率がとられているが、いずれの測定結果についても、この因子にかかる係数の値が他の係数に比べてきわめて大きいことが注目される。このことが、モデルの基礎となっている行動仮説とどう関連づけられるかは1つの問題点となろう。

【武野秀樹】

三上隆三

### 『近代利子論の成立——ジョウゼフ マッシー研究——』

末来社 1969.3 402, 41, vii ページ

本書の目的は「忘却された人物」、「一無名経済学者」であり、学説史上「孤高」の地位におかれたジョウゼフ・マッシーを再発見し、『自然利子率の支配的原因』その他の著作におけるかれの利子論に「近代利子論の成立」をみいだそうとすることにある。マッシーの名がはたして「無名」の語に値するかどうかは別として、すくなくとも独立の研究対象とされることのほとんどなかったマッシーに著者は自信と抱負をもって諸種の角度から光線をあたえようとしている。そのために本書は「政治算術家」マッシー、かれの著名な文献カタログ、かれの方法論とでもよばれるべきものにふれた序章、マッシー前史としての、カルペパーからチャイルドやロックにいたる、17世紀の利子論をあつかう第一章、マッシー利子論そのものを対象とし、あわせてヒューム、スミスとの関連にも論及する第二章、カンティオン、テュルゴ、ステュアートなどの同時代の利子論との対比でマッシー